

地域ニュース

現代の名工 府内から5人

国内で最高水準にある現役の技能者を表彰する令和4年度の「現代の名工(厚生労働大臣表彰)」に、府内から陶磁器製造工で森俊山代表の森俊次さん(65)と東山区から5人が選ばれた。ほかの表彰者と技能の概

要は次のとおり。

(敬称略、年齢は1日時点)
▽手かじ工 植田充紀(71) 下京区 金属工芸の伝統的な鍛金技術を駆使し、難しいとされる煮込み着色にも優れている。作品は軽量で使い勝手が良いこ

とが特徴。

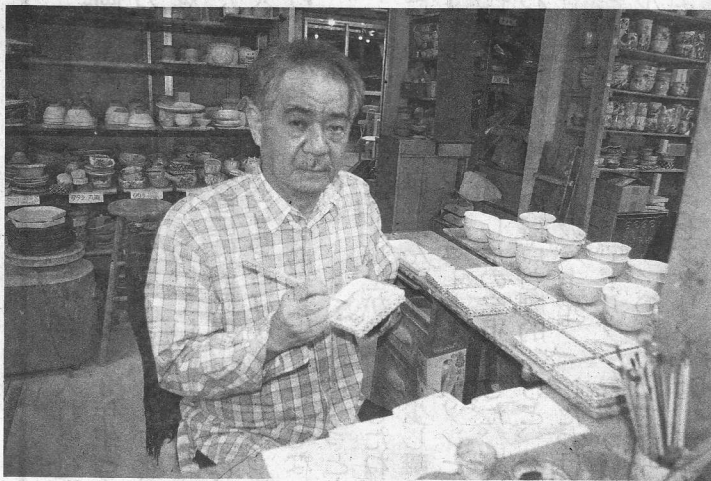
▽織布工 小玉紫泉(70) 北区 西陣、爪搔本綴織の職人。爪で糸を掻き寄せて少しずつ織る伝統技法を活用し、新たな製織技術を考案した。
▽タイル張工 奥田隆夫

(59) 亀岡市 44年間従事した技能と経験でタイル張り全般の工程に精通。小型から大型タイルまで施工箇所に合わせて最適な工法で施工ができる。

▽印刷師 畑秀明(70) 上京区 明治4年創業の老舗「畑正一」の4代目。美しく高品質な印鑑を作り出す技能士で、「密刻」という絵画のような作品を得意とする。

尾形乾山の作風受け継ぐ

陶磁器製造工 森俊山代表・森俊次さん (65)



尾形光琳の弟で江戸時代を代表する陶芸家、尾形乾山(1663~1743年)の作風を受け継ぎ、第一線で活躍している。「努力と技術が認められ、うれしい。チャンネルを続けてきてよかった」。職人らしいいかつい顔がほころんだ。

東山区の泉涌寺のふもとで大正時代から続く窯元に生まれた。専門学校卒業後、家業に入ったが「オリジナル作品を作りたい」と8年間、他の窯に師事。その後、再び家業に戻ったときに「乾山の奥深さに気が付いた」という。花びらを模したような形状や光を通すための「透かし彫

り」の技法など「乾山は今から300年も前に、現代風の陶芸を実現していた」と解説。自身が手掛ける食器や一輪挿しといった作品にもこれらの技法を取り入れ、得意とする紅葉や桜といった季節の絵付けが趣をさらに深めている。

若手の育成にも熱心で、主宰する「俊山窯」から、これまでに約20人が巣立った。「若手には『いずれ独立しろ』と後押ししている。意欲のある人の方が一生懸命なんですよ」と語る。近年、植木鉢の依頼を受け、たのを機に、自分でも盆栽を始めたところ「面白くなっはまってしまった」。窯の前に並べた植木鉢を眺めて笑った。

(平岡康彦)